
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界 写真展 特別号 (ボランティア ニュース No.32 から抜粋編集)

イザベラ・バード写真展の開催経緯

北大総合博物館教授 昆虫体系学分野 大原 昌宏

北海道大学総合博物館冬期企画展示「ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界 写真展」が2014年1月25日から始まり、5月11日まで開催しています。

さて、この展示会が北大総合博物館で開かれることとなった経緯について、すこし記しておきたいと思います。

本展示の監修をされている金坂清則先生は、地理学がご専門で京都大学の名誉教授をされています。2012年10月、私は大学博物館に関するシンポジウムに参加するため、英国のノーリッジへ出かけました。そこで以前からよく存じ上げている京都大学総合博物館の大野照文館長と永益英敏先生とご一緒になり、その際に「北大でイザベラ・バードの写真展を開催しませんか」というお誘いを受けました。京大総合博物館ではすでに2010年に本展示を開催されており、金坂先生の希望もあり、巡回展として「ぜひ北大の博物館でも開催を」というお話でした。たまたま札幌から英国までの飛行機の中で、私はイザベラ・バードの「日本奥地紀行」を読んでおり、この話を聞いた時に「今、読んでます」と手許の本を彼らに見せたのでした。「では決まりですね」とあれよあれよと北大での開催は決まってしまう、2013年の東京大学駒場博物館での開催の後、2014年に北大で本展示を開くことが決まりました。

東大駒場博物館の担当者は、伊藤元巳館長と折茂克哉先生で、伊藤館長とは地球規模生物多様性情報機構 (GBIF) のプロジェクトで以前よりお世話になっていた旧知の仲でした。こちらでも知り合いの先生が担当ということで安心をして展示の引き継ぎなどを行うことができました。

2013年4月には、金沢星稜大学の土田卓爾先生から電子メールがあり、ルイス (George Lewis) について教えてほしいという内容でした。ルイスは、私が専門としているエンマムシ (昆虫綱コウ



チュウ目) の分類学者で、130年程前に日本を訪れ、多くの日本産エンマムシを新種記載した人です。私はルイスの研究を辿る形で現在の日本のエンマムシの分類研究をしているのです。上田先生がルイスについて知りたがった理由は、ルイスが日本に来た時の通訳が、イザベラ・バードの通訳であった「伊藤鶴吉」であり、伊藤について詳しく研究するための情報収集でした。ルイスとバードが繋がっていたとは。私と本展示を繋げる旧知の人物がまた増えました。

2013年夏に金坂先生は本展示打ち合わせのため、札幌を訪れてくださいました。東大の折茂先生も御一緒してくださり、北大での展示にむけて様々な御助言をいただきました。この折、私と私の知り合いとバードと本展示のかかわり合いをお話しし、何かバードが本展示を私に担当するように知り合いを総動員しているかのようだ、人の巡り合わせの奇遇に驚いたものでした。

英国に行く際、私はどうしてバードの「日本奥地紀行」を読もうと思ったのか。うろ覚えで、確かではありませんが、お世話になった植物学者の辻井達一先生が熱心に「イザベラ・バードの道」

を現代に復活させようとしていたことも、バードを読むきっかけだったかもしれません。昨年亡くなられた辻井先生にも、「北大でバード展をやりなさい」と言われている気がします。

バードの日本の旅行の目的地は、蝦夷でした。

アイヌに会い、130年前の北海道の風景を綴っています。多くの北海道民は親しみをもってバードを読むことができます。ぜひ読んで、バードと金坂先生の写真をじっくりと鑑賞してもらえればと思います。

「イトウ」と「ルイス」 ～イザベラ・バードの旅の世界に寄せて～

図書ボランティア 久末 進一

「1881年6月9日、木曜日、京都。・・・ロンドンのL氏夫妻が今夜到着した。かねて蝦夷地で数カ月間、昆虫の採集を行なってきた氏が、京都近郊でこれを続行するためである。夫妻はミス・バードの国内旅行に同行したイトウという通訳を連れていた。」

これは金沢星稜大学の上田卓爾氏が指摘する『クロー 日本内陸紀行』（岡田章雄、武田万里子訳、新異国叢書第11輯10、雄松堂出版、1984年刊）の61ページ11行目の記述である。

同書は1883年にロンドンで出版された英国の「王立地理学協会特別会員」（1882年登録）アーサー・H・クロー(Arthur H. Crow)の著書『Highways and byways in Japan: The experiences of two pedestrian tourists, (日本の公道と間道—2人の徒歩旅行者の体験)』の全訳版。今から133年前の1881(明治14)年来日。日本各地を巡り歩いて、明治の異国日本の風物や名所をつぶさに見聞したクローが、その約3ヵ月半の旅日記をまとめたもの。彼の生涯唯一の著作ながら、生没年も含め、経歴には謎が多い。来日時、彼は20代の青年ながら英国人としては上流階級の知識人で、のちに船舶所有の商人として「クロー・ボガード・ロードルフ商会」経営者となる身分の資産家だった。同行者は友人アーネスト・ビルブローと日本人通訳「ヨシ(本名不詳)」。

冒頭記述は6月1日横浜到着後、神戸、大阪を経て京都見物のため、円山公園内の安養寺宿坊を改装した「也阿弥ホテル」(井上万吉氏が明治12年開設)に宿泊した時の出来事。偶然にも「ロンドンのL氏夫妻が到着した」というが、このL氏こそ、のちに昆虫学界の世界的権威となったジョージ・ルイス(George Lewis, 1839-1926)である。

ルイスは1839(天保10)年8月15日、ロンドン郊外ブラックヘッドで牧師の子として生まれ、若い頃から昆虫に興味を持つ熱心な蒐集家だった。1862年から茶の取引をする商会の代表者とな



写真-1 ジョージ・ルイス(英、1839-1926)
(野村・藤野、1992より)

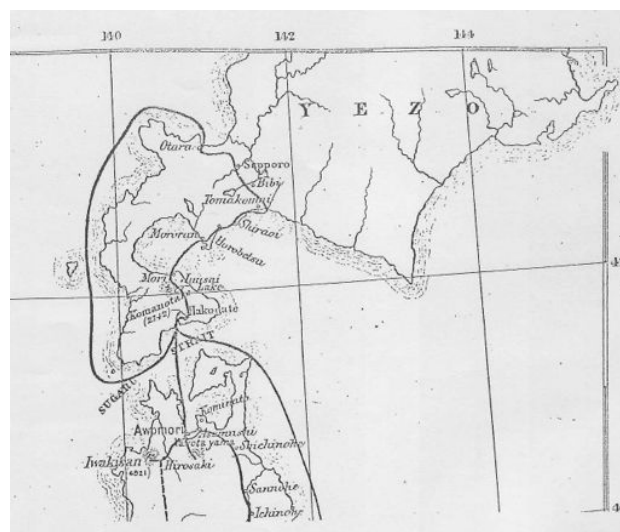


図-1 小樽から札幌へ 1880(明治13)年来道した際のルイス夫妻の足跡。

「Biby(美々)」「Tomakomai(苦小牧)」「Siuraoi(白老)」「Horobetsu(幌別)そして「Mororan(旧室蘭)」の駅通所在地をたどっている。(草間、1971より)

り、22歳で中国に渡る。商用のかたわら昆虫採集と標本制作を続け、専門家の指導の下、昆虫の同定能力と採集技術、研究論文で卓抜な才能を発揮。昆虫採集のため1867-1872年と1880-1881年の2回、来日しており、ハンミョウ科、オサムシ科、カミキリムシ科、コガネムシ科の日本産甲虫の新

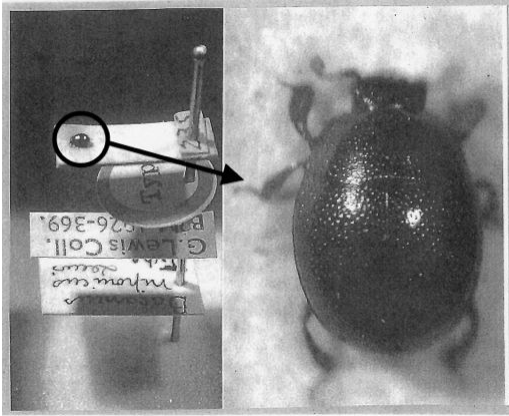


写真-2 ルイスが来日した際に採集した「アカツブエンマムシ」(*Bacanius niponicus* Lewis)。標本は英国自然史博物館(Natural History Museum, London)収蔵。(大原教授提供)



写真-3 ルイスが1880年8月5日から16日、札幌で採取した標本「コアカツブエンマムシ」(*Bacanius mikado* Lewis)=*Abraeus mikado* Lewis。標本は英国自然史博物館収蔵(Natural History Museum, London)収蔵。(大原教授提供)

種発見でめざましい成果をあげた。彼の来日前は22種しか知られていなかったカミキリムシ科は合計236種、コガネムシ科やエンマムシ科も多数の新種を記載。日本各地を採集旅行し、後世の研究の基礎となる貴重な標本を遺す。

クロウとの出会いは第2回目の来日の時で、この時、彼は42歳で、妻ジュリアを同伴していた。前年の1880(明治13)年2月17日横浜に渡来。箱根、日光、中禅寺、渡良瀬川流域等で昆虫採集を続け、同年7月9日汽船で函館に来て、七飯や駒ヶ岳周辺で採集。8月3日函館から汽船で小樽を訪れ、札幌には8月5日到着。さらに採集旅行は美々(16日)、苫小牧(17日)、白老(18日)、幌別(19日)、室蘭(21日)と続き、汽船で対岸の森へ渡り、函館に帰る。鉄道開通以前の当時、これは駅通をたどる不便な旅でもあっただろう。その後、東北各地を巡って横浜で越年。翌1881年は2月には長崎、4月熊本、5月は九州各地を調査する。そして、6月に神戸を経て10日から京都周辺の採集を実施しており、その前夜に也阿弥ホテル到着ということになる。

ルイスの採集旅行はその後にも日本全国に及び、11月3日に帰国までにぼう大な標本となる。彼の尽力で特に日本産エンマムシ科の蒐集は顕著で、約7割が彼によって新種として発表されている。他の科や中国、セイロンでの採集標本の合計数は数万点に及ぶが、その多くは大英博物館が収蔵、保管した。1880年、その大英博物館の自然史部門が独立する。これが現在の「自然史博物館(Natural History Museum)」(ロンドン)で、ルイスの実物標本はここに移管、保存されている。

写真-2がその『タイプ(Type)標本』の例で、虫ピンにとめられたラベル記載情報から、ルイスが

来日時に採集した日本産『アカツブエンマムシ(*Bacanius niponicus* Lewis)』=背面=である。また、写真-3は「Sapporo」ラベルにあるように1880年8月5日から、ルイスが滞在した札幌で採集した『コアカツブエンマムシ(*Bacanius mikado* Lewis)=*Abraeus Mikado* Lewis)』=腹面=も収蔵されていた。その学名「mikado(ミカド)」には、ルイスの異国日本に寄せる想いがこもっているようだ。

さらにクロウの記述で興味深いのは「バードの通訳イトウ」をルイスが連れていたことである。イザベラ・バード(1831-1904)は英国「王立地理学協会最初の女性特別会員」の榮譽を得た、いわばクロウの先輩であり、クロウは彼女の『日本奥地紀行(Unbeaten Tracks in Japan)』(1880年刊2巻本)も愛読している。バードはルイスより2年前、1878年(明治11)年に来日して8月から9月まで道内旅行した。横浜から函館に来て森から噴火湾を渡って室蘭、そして、平取まで道南をつぶさに見聞するが、日本人通訳「Ito、イトウ」がその旅を助け、彼女の著書内でも度々紹介されていることは、広く知られるところである。9月14日に旅を終えたバードに函館で今生の別れをした後、「イトウ」は英国人植物学者チャールズ・マリーズの通訳となり、その後、ルイス夫妻の通訳として活躍したということか。

本名は伊藤鶴吉。1858年1月31日(安政4年12月17日)-1913(大正2)年1月6日が生没年。相模国三浦郡菊名村(神奈川県三浦市)生まれ。横浜寿町在住の外国人内地旅行案内業「通辯(通訳)」(1877年当時)で、10代で米国公使館や横浜駐留英国軍将校のボーイとして働き、英語に親しむ。横浜に来日したばかりのバードが、ヘボン博士(1815-1911)の邸宅で、博士立会いで通訳兼ガイドの

面接試験中、推薦状なしで飛び込み応募。英語力はともかくバードと同等の 150 センチほどの身長と気転のきく忠実な性格、清潔好きな態度が気に入られて採用された、当時 20 歳の青年だった。

バードの後、マリーズに雇われ、同様な英国人同士の縁もあってか、ルイス夫妻に雇われていたと考えられる。はっきりしていることは、ルイス夫妻の北海道の旅は通訳「イトウ」の案内で小樽－札幌－苫小牧－室蘭（海路）森－函館を辿り、“バードの道”とは逆廻りである。それは「イトウ」にとってバードへの追憶と感傷の旅であったばかりでなく、プロガイドとしての自立の道を歩む旅であった。やがて、彼はガイド組織「開誘舎」を 1889（明治 22）年設立。1905（明治 38）年、米国の鉄道王、エドワード・ヘンリー・ハリマン来日で通訳を務め、米国の鉄道・汽船全ての無料 1 等乗車券を贈られる。1910（明治 43）年にもインドのバローダ藩王国国王を日光に案内するなど、“通辯の元勳”と評される活躍をした。胃癌のため横浜市松影町の自宅で死亡。享年 55 歳。

バードが見なかった札幌を、「イトウ」はルイスを案内してしっかり見ていた。『がに股ながら頑丈な体躯、のっぺりした丸顔に細い目、重そうに垂れたまぶた』などと、バードが著書で紹介した、その細い目を通じて、「イトウ」はルイスと共に札幌農学校の緑の農場を眺めて歓声をあげたかもしれない。

昆虫学界に名声と大きな功績を遺して、ルイスは 1926 年 9 月 5 日、英国ケント州フォークストーン市の自宅でひっそりと生涯を閉じた。享年 87 歳。遠慮深い性格だったためか、一般にあまり知られず、子供がなかったためか、子孫はいない。その死から 3 カ月余り、日本が「昭和」に変わったのは同年 12 月 25 日である。

商人として一生を終えたクロウの最後はわからない。1950 年代の死亡が推測されている。京都「也阿弥ホテル」は立派な庭園があり、洋風に日本座敷を改築。石油ランプ照明、各室カーテン仕切り、洋食を供すなど、外国客に喜ばれたが、1906（明治 39）年火災のため焼失した。



写真-4 伊藤鶴吉(1858-1913)
(ウィキペディア)

今から 133 年前、明治 14（1881）年 6 月 9 日、京都「也阿弥ホテル」という凝縮した時空で、未踏の世界に挑む者たちが交差した。まさにそれは知られざる歴史の中の奇跡の一瞬であった。

[資料提供・教示]

大原昌宏（北大総合博物館教授）

金坂清則（京都大学名誉教授）

[参考文献]

クロウ, A. H. (1882) 日本内陸紀行。岡田章雄・武田万里子訳、雄松堂出版、1984 年。

金坂清則 (2000) イトー、すなわち伊藤鶴吉に関する資料と知見。地域と環境、第 3 号、京都大学大学院人間環境学研究所。

草間慶一 (1971) 「ジョージ・ルイスの足跡について」(上・下)。月刊むし、1971 年 11, 12 月号。

野村全・藤野直也 (1992) GEORGE LEWIS 覚え書き (1)。昆虫学評論。

ウィキペディア

[取材協力] 中井稚佳子、西本結美、星野フサ、山岸博子の皆さん。

(「ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界」写真展は北大総合博物館にて 2014 年 5 月 11 日まで好評開催中)

北海道大学総合博物館ボランティア ニュース
ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界 写真展 特別号
(ボランティア ニュース No.32 から抜粋編集)

◆編集人: 北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員: 石川、沼田、星野、山岸、児玉)

◆発行人: 在田一則

◆発行日: 2014 年 3 月 1 日

◆連絡先: 〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 Tel: 011-706-4706

◆ボランティアニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>